
喧々諤々アフタヌーン

正木 慶史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喧々諤々アフタヌーン

【Nコード】

N6136T

【作者名】

正木 慶史

【あらすじ】

登場人物の名前も無く、地の文も無い文章で恋愛小説は書けるのか？と思いついて書いたが、結局は頭の悪そうな、愚にも付かないコメディちっくな小説もどきができただけなのだよ。

「ギリシア人って美少年を好きすぎよね。プラトンなんて美少年と恋するのが正しい男の生き方!とか言っちゃうし」

「……いや、まずどんな返答をして欲しくてその発言をしたのかが分からない」

「『俺もプラトンの意見に賛成!俺も美少年の襟足をペロペロしたい!』くらいは言うかなと思った」

「お前の中の俺はどんだけ変態なんだよ!?!」

「えっ……変態じゃないの……?」

「そこ驚くところ!?!」

「いや……ずっとホモかショタコンだと思ってたわ……」

「女が好きですが!?!」

「女が好きって言うとなんか女たらしみたいな響きよね」

「そこまでいくと語弊があるんだが。どちらかと言うとプラトニックな恋愛を重視する方だから」

「プラトニックって、プラトンなんだからやっぱりショタコンなのね」

「なぜそっちの方向に持っていきたがる!」

「ていうかさ、さっきからやかましい。どんだけ感嘆符使いたがるのよ」

「……誰が叫ばしってると思ってやがる」

「やらせてるのは私だけど、叫んでるのはあなたよね。まったく、自制心のない男はこれだから」

「もうやだこいつ。めんどくさい……」

「あら、私は楽しいけど」

「そりゃね!からかう奴はいつだって楽しいだろうよ!こちとらツッコミまくって疲れるんだよ!」

「うわ……ツッコミまくって疲れるとか卑猥だわ。ちょっと半径1

0 m以内に入らないでくれる？襲われると嫌だから」

「もうやだこんな幼馴染み……」

「ねえ」

「……………なんだ」

「あら。そんなに怯えなくてもいいのに。ちょっと質問したいことがあって」

「ふざけた質問したらはたくぞ？」

「ええと、ふざけた質問と真面目な質問どっちから聞かれない？」

「言ったそばからこいつは……」

「じゃあふざけた質問からね。『臭いを嗅ぐならニーソ？タイツ？』」

「…………絶対答えてやんねえ」

「まあ、あなたのエロ本収集歴からかんがみると、タイツなんですよけどね」

「なんでお前が俺のお宝本を知ってるんだ!？」

「『タイツ☆倶楽部』ってタイトルはなかなか古臭い響きよね」

「やめろー！本当にやめろー！いいか！それ以上言ったらお前を華厳の滝から突き落とすぞ！」

「じゃあ次は真面目な質問ね」

「もう好きにやってくれ……」

「…………『キリスト教社会では自殺は重大な罪だと考えられていた。しかし、近代社会では自殺は罪ではなくなった。自殺に対するこの2つの見解の違いはなにに因るものなのか。説明せよ』」

「落差！さっきの質問とのかかなりの落差！」

「ふふ、落差の女王と呼ばれた私にすれば、このくらいの落差はお茶の子さいさいよ」

「なんだその珍妙なあだ名！」

「それで。この質問に対する答えは？」

「えっ。ええと、そうだな……。キリスト教社会では命は神さまから与えられた物であり、粗末にしてはならないと考えられていて、近代社会では個人の意思が尊重されるため、自殺ですら個人の自由であるから、とかか？」

「あっ、ごめんなさい。枝毛見てたら聞き逃してたわ。もう一回言ってくれる？」

「チクショー！俺の本気は枝毛に負けんのかよ！」

「暇だわ」

「なら自分の家に帰って寝てろ。俺のベッドを占領してまで漫画を見るな」

「ちよっと待って。いま宗匠が切腹するシーンだから」

「女子高生がへうげものを見るなよ。もっと少女漫画とかを読め」

「嫌よ。あんな薄っぺらくて下らない恋愛を見るくらいなら死んだ方がましよ」

「女子高生の吐く台詞とは思えない」

「それに、現実の恋愛が上手くいってないのに、他人の恋愛を見てなにが楽しいのよ」

「上手くいってない？なんだお前でも恋のひとつやふたつしたいと思ってるんだな」

「……なによ。悪い？」

「いやいや、悪くはねえよ。その顔で浮いた話が一切なかったから逆に心配してたくらいだ。しかし、上手くいってないのか」

「……ええ。相手は驚くほど鈍感だね。私の想いをまっったく気づこうとしないのよ」

「ははは。マジか。お前くらい顔が良ければ男なんて向こうから寄ってくるもんだと思ってたが」

「いつも一緒にいるから私の事を好きなんだと思ったら、どうも友達以上にはならないし」

「そういう場合は早いとこ告白した方がいいぞ。いったん気づかせたら後はトントン拍子で上手くいくさ」

「上手くいくと思う？」

「大丈夫だ。絶対上手くいく」

「そう。なら告白してみるわ」

「おう。頑張れよ」

「話は変わるんだけどね」

「うん？どうした？」

「あなたが好きよ」

「……………へ？」

「聞こえなかった？あなたが好き。子供の頃からずっと好きだった。というか今でも好きって言ったほうが正しいわね。いや、好きより愛しているの方がより正確かしら。あなたの、笑うと目元がふにやりと緩む顔が好き。ちょっと鈍感だけど優しい性格が好き。昔は私より小さかったのに、今では私より大きくなった身体が好き。つまりあなたのすべてが好き。私の恋人になって」

「……………はあっ!？」

「なによ、そんな間拔けな声なんかあげたりして。告白しろってあなたが言ったのよ？」

「いや……………ちよっ……………ちよっと待て！落ち着けいまから整理するから」

「私は落ち着いてるわよ。テンパってるのはあなただけでしょ」

「えっと……………さっきお前が言ってた『上手くいってない』相手ってのはもしかして、俺？」

「言わなくてもわかるでしょ」

「えっ、ちょ、なにこの超展開」

「超展開でもなんでもないわよ。ずっと昔からあなたが鈍感だっただけよ」

「おい。それじゃもしかして、バレンタインに毎年のようにお前がチョコくれてたのは……」

「どっかの馬鹿は義理チョコだとかお情けでくれた、とか考えてたみたいだけどね」

「友達に彼女が出来ないって言ったら、『はあ？お前なに言ってるの？殺すぞ？』とか、『お前は全国のもてない男を敵にまわした』とか、『最近のおモテになるかたは彼女がいるのにいないとかいっちゃうのね。うふふ、ぶっ殺す』とか言われたのは……」

「周りの人達は、私達のことを事実上のカップルだと思ってるわ」「まじで!？」

「まじよ」

「なんで事実認識にドーナツ化現象が起きてるんだ!」

「あなたが鈍感だからでしょうが。って私にツツコミさせないでよ」

「毎日一緒に登下校する。お互いの誕生日には誕生日プレゼントを贈り合う。毎日弁当を作ってきて一緒にご飯を食べる。お互いの家族とはもはや顔見知り通越して新年を共に過ごすほどの仲。こんなものかしらね、私達の関係は」

「おいおい。冷静になって見たらこの関係ってほとんど恋人のそれじゃないか!」

「だから言ったじゃない。周りはほとんど恋人同士として見てるって」

「うわあ……。ほんと、自分にうわあ……」

「で、どうするのよ」

「どうするってなにがだ?」

「だから、私のした告白。まだ返答を貰ってないんだけど」

「いや、もうほとんど恋人のようなものじゃないか」

「馬鹿ね。まだ私達は幼馴染み以上恋人未満よ。あなたが告白に応

じてやっこの問題は終わるの」

「うっ……なんかやるとなると恥ずかしいな……」

「女の私が告白したのに、答えられないくらいあなたはへたれなのね」

「へたれ言うな！ええと……ずっとお前の事は幼馴染みとしか思っ
てなかった。だけど、今日やっ自分の気持ちに気づけた……と思
う。お前が好きだ。付き合ってくれ」

「歯切れが悪いわね」

「いや、だってお前のことは幼馴染みとしか見てなかったし。まだ
好きだという実感が……」

「まあ、いいわ。どうせ最終的にあなたは流されるんだし」

「自分で言うのもなんだが、俺もそう思う。なんか、なあなあ感
じで結婚まで行きそう……」

「もしそれが嫌なら、いつか私があなたを落としてみせるわ。あな
たの事ならなんだって知ってるんだから、あなたが私から離れられ
ないようにするのは簡単よ」

「……なんだか今のお前すごいテンション高いな」

「それはそうよ。好きな人と恋人同士になれたんだから」

「お前ってさりとて可愛い事言うよな」

「あら、赤面して顔を背けるあなたの方が可愛いわよ」

「可愛いとか言うな！」

「そろそろ戻るわ。親に付き合う事になったのを報告しないといけ
ないし」

「そんな大袈裟な。どうせいつかは知ることになるだろうし、言わ
なくてもいいんじゃないか？」

「ダメよ。今回の告白が上手くいくかどうかでみんなが賭けをして
るんだから」

「娘の告白を賭けの対象にするなよ！」

「ちなみに本命は、『告白するがへたれが過ぎてなかったことにされる』だったわ」

「俺の安定感のありすぎる信頼のなさ！そんなチキンだと思われてたの！？」

「高校の友人たちも参加したんだけど、友人たちみんなあなたがチキると思ってたわ。告白を受け入れるを選んだ人間は一人だけだったわ」

「ひどい！」

「オッズは1000倍だったわ」

「万馬券かよ！」

「というわけで、あぶく銭が手に入ったの。明日、デートに行かない？」

「えっ？つてことはお前が……」

「ええ。私が選んだの。やっぱり大穴狙いよね」

「そっちかよ！上手くいきますように、とか可愛らしい考えじゃねえのかよ！」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6136t/>

喧々諤々アフタヌーン

2011年5月28日15時25分発行